

小論文

(2枚中1枚目)

以下の文章を読んで、下記の問いに答えなさい。解答は解答紙の解答欄に記述すること。

著作権上の理由により、非公開としています。

小論文

(2枚中2枚目)

著作権上の理由により、非公開としています。

千葉聡『招かれた天敵 生物多様性が生んだ夢と畏』(みすず書房、2023年、90-93頁)

* 出題のために一部、表現を変えている。

- * (チャールズ・) エルトン (1900-1991) イギリスの動物生態学者。食物連鎖や生態ピラミッドなどの研究により、現代の動物生態学の基礎を築いた。一九五八年の著書『侵略の生態学』で、外来生物が地球上の生態系に対する最大の脅威のひとつだと主張した。
- * (レイチェル・) カーソン (1907-1964) アメリカ合衆国の生物学者。一九六二年の著書『沈黙の春』は、農業が環境に及ぼす有害な影響を指摘し、その後の環境保護運動の起点のひとつとなる。
- * アルネ・ネス (1912-2009) ノルウェーの哲学者。カーソンの著書に影響を受け、すべての生命存在が固有の価値をもつとの立場から、人間の利益だけに収まらない環境保護を進める「ディープ・エコロジー」を提唱した。
- * アルド・レオポルド (1887-1948) アメリカ合衆国の生態学者、思想家。現代の環境倫理学の基礎を築く一方、外来生物を「土地の美的価値を損なうもの」と断じ、外来生物が定着した土地を「病氣」に喩えた。
- * フランク・バックランド (1826-1880) 19世紀英国の博物学者。外科医から転じて科学コミュニケーターとなる。英国順化協会を設立、食用か観賞用かを問わず、あらゆる動植物の英国への導入、順化、定着を目指し、資源を増加させることを目指した。

問1 筆者は文中の下線部(1)で、「生態系中心主義」と「排外主義」の関係について述べている。ここでいう排外主義とは、続いて説明される人間による差別や迫害を指すと考えられるが、それがなぜ、どのようにして生態系中心主義と結びつくことになるのか。筆者の論旨を踏まえ、独自の事例も挙げながら、解答者自身の考えを10~15行程度で述べなさい。(40点)

問2 下線部(2)では、人間中心主義の立場にもとづく生物多様性の価値が端的にまとめられている。ただし、生態中心主義の観点からすれば、そこにも問題があると考えられる。では、その問題点として、どのようなものが考えられるか。また、冒頭で説明されている外来生物の問題に対して「自然中心」と「人間中心」の対立を乗り越えるために何が重要となるのか。参考となる具体的事例や出来事、作品などを一つ挙げて、解答者自身の考えを20行~30行程度で述べなさい。(60点)

小論文

解 答 紙

受 験 番 号

(3 枚中 1 枚目)

(10)

(20)

裏面には解答しないこと。裏面に解答しても採点しません。

小論文

解 答 紙

受 験 番 号

(3 枚中 2 枚目)

(10)

(20)

裏面には解答しないこと。裏面に解答しても採点しません。

小論文

解 答 紙

受 験 番 号

(3 枚中 3 枚目)

(10)

(20)

裏面には解答しないこと。裏面に解答しても採点しません。